ソ連抑留の思い出

岩手県　千代川　幸吉

昭和二十年八月十日未明、私ども開拓団にも、軍籍ある者は牡丹江・兵事部の指揮下に入れ、家族は安全と思われる所に避難させよ、との命令が鶴立県公署よりあった。

私も家族たちより一足早く家を出た。本部前に集合、鶴立駅に出た。どこかで銃声がする。鶴岡鉱山より来た貨物車に鶴立県内在郷軍人が乗車する。非常時の軍用車が十二日夜やっと牡丹江に着く。満鉄社員はどこにいるのか。

早速牡丹江で、満州第五〇三三部隊（豊浦部隊）小林隊に編入されたが、すでに牡丹江市内は火の海。第二陣地予定地の横道河子に集合の命を受け解散、各自で行軍した。途中で鉄道隊員から、内地広島に十年も十五年も草木が生えないほど強い爆弾が投下されたと聞かされたが、それがどんなものか知るよしもない。

横道河子で隊長より、日本は米英に降伏したことを聞かされ、そのとき若い見習士官が自殺したことも聞いた。山中に入ってゲリラ戦をという話もあったが、結局武器を捨てた。

拉古病馬廠で一週間滞在し、東京ダモイということで、隊長以下一千人の大隊に編成されて行軍したが、あの日の朝、別れた家族たちの安否が気にかかった。牡丹江市内を通り過ぎ、三日目に、大型自動車に乗れとの命令で、行軍で疲れ果てていたし喜んでその車に乗った。

間もなく国境を通過したが、進行先は南東で、二時間ほど走ったところから左折して細路に入って十分間ぐらいのところで下車させられたが、そのとき元鉄道隊員だった人がその辺の地図を出して見たところをソ連の警備兵に見られ、没収された。そんなとき「みなの者あきらめろ、この近くに興凱湖という大きな湖がある、それに入られて殺されるぞ」とか「いや日本に帰る船を待つための待機だ」など悲喜両論が出たが、

結果的には作業のための下車だった。

それから三、四日後、刃渡り一尺五寸もある大きな草刈り鎌が渡され、草刈り作業をさせられた。刈り取った草の梱包作業などし、ここでシベリアでの第一回目の新年を迎えた。

その後ウオロシロフ市近辺で飛行場の拡張工事、木材の伐採、満州から運んでくる物資の積みおろし作業、コルホーズの作業など、あの極寒の地で劣悪な糧食と過酷な作業ノルマで多くの者が帰国の夢を果たせないまま凍土の丘に永眠した。

私が五か月間の伐採作業から元の収容所に戻ってみたら、意外なことが起こっていた。それは、満州開拓団時代からの親友だった同じ町出身の村上丑蔵さんの死である。その死因について事実関係を聞くと、村上さんはソ連側にも信望があって、当日も二十人ほどの作業員を引率して、ソ連の警備兵とともに作業現場に着いたが、作業のことで現場警備兵と口論があった後、村上さんが足下にあったレーキを取り上げて作業を始めようとしたら、その警備兵は自分が襲われると勘違い、村上さんに向け発砲し、村上さんは心臓を貫通され、そのまま「ウー」を最後に即死したとのことだった。これも捕虜という身の哀れさである。

二十二年の春、汽車に乗せられてハバロフスクを通り、山の中を北東に進み到着したところが真岡の対岸、ソフガワニという港町だった。ここで十月ころまで建設作業をし、寒さが加わるころ船で沿海州岸を南下してウラジオに上陸、ボタ山の見える炭鉱で下車した。

ここの作業は地下で、私も生まれて初めての地下作業である。ここが私の墓場になるかとさえ思った。早速翌日の午前中、落盤事故防止の注意を受け、その翌日から入坑して作業開始だ。現場は二十四坑道、作業は坑木運搬と採炭で、ここでの糧食は地上作業の三割増くらいで、あまり空腹を感ずることがない。私は初心者でも、在満中鶴岡鉱山経験者が多く、心強かった。

ここで三か月ほど経たある日の午後四時一番方の私たちが下番するとき、どこの収容所から来た日本人か、防寒服に防寒帽、それにカンテラ掲げて入坑する五、六人の人たちに出会った、それから私が夕食を済ませ

床に入ろうとしたとき、二十四坑道全員集合の命令が出た。身支度して出ようとしたら中止とのこと。坑内が爆発したが入坑不能とのこと。

翌日坑内に行って見たが、驚いた。厚さ一寸ほどもある鉄板が飴のように溶けている。爆発の原因は電気スイッチのスパークによる炭じん爆発だったが、これも入坑中禁じられている日本人のタバコの火ということになった。ここでも捕虜の身のつらさを痛感した。

亡くなった人たちには気の毒だが、もしあの爆発が二時間早かったら、今の私はない。戦後最初から坑内作業で抑留三年間事故なく帰国した者、初入坑当日爆死した者、これも人生の奇遇か運命か。あのころのことが脳裏に浮かぶ。

シベリア抑留体験記

島根県　阿部光明

昭和二十年八月九日一時ころより空襲警報の発令もなく突然爆裂音が聞こえた。それは暁部隊北鮮羅津通信所のある近くの朝鮮軍材料置き場の大爆発である。それまではB29の偵察程度のことはあり、米軍機かと思ったら、夜が明けるとソ連機であることがわかった。目と鼻の先のウラジオストックからの爆撃は一日じゅう続き、八月十日、羅津の港の艦船は全部撃沈された。八月十二日、空襲の激しい羅津をあとに中隊本部と通信所は南下した。昼は空襲が激しいので夜の行軍である。八月十五日、清津へ敵が上陸したとのことであり、十七日、散兵戦をしき敵と白兵戦をすることになった。十八日、羅南の弾薬庫の爆発で大音響が聞こえた、我が友軍機の姿は一機もなく、何の抵抗もない敵は我がもの顔に徹底的に爆撃し続け、口惜しく、情けないが逃げるに精いっぱいである。午後二時ごろ戦争は終結したとのことで、羅南を撤収し吉州方面へ転進せよとの命令である、しかし我々兵には何が何だかさっぱりわからなかった。

八月二十日、着剣して皇居を遙拝拝し涙を流しながら菊の御紋を削り、一か所に集め焼却処分した。日本